

<特集：ツアーで出会う>

境界をこえてみえるもの

—中国・内モンゴル自治区におけるフィールド調査から—

野村理恵

はじめに

「内モンゴルにいったらみいひんか」

博士前期課程2年生の頃、急に呼び出された研究室で聞いた、指導教員からの思いがけない一言である。当時就職活動に奔走していたので、突然の出来事に驚いたのだが、一週間後、モンゴル語でゲルと呼ばれる天幕住居（中国語で包 bao）の中からそのドア枠で切り取られた絵画のように美しい草原をうっとり眺め、塩入りのミルクティーを飲んでいて。このとき、乗用車で駆け抜けた草原とそこで出会った人々の印象が頭から離れず、悩んだ末に博士後期課程へ進学することを決めた。

それから約4年間、内モンゴルと日本を往復する日々が始まり、1年に最低3度、多い時には5度以上訪れている。訪れた季節や期間は様々で、3日のこともあれば、1カ月以上滞在したこともある。また、中国・内モンゴル大学モンゴル学学院への派遣留学の機会を得て（奈良女子大学大学院人間文化研究科との部局間交流協定による）、2008年の夏から約1年間、内モンゴル自治区のフフホトというまちに暮らした。

これらの経験より、「内モンゴルのフィールドワーカー」という代名詞で紹介されることが増えた。しかし、何年間もその地域に入って「参与観察」を主とした調査を行うフィールドワークと異なり、比較的短期間のツアーを繰り返すという点ではフィールドサーベイと呼ばれる手法に近い¹⁾。そのため、自分のことをフィールドワーカーと称するのは気が引けるのだが、現地へ行って、現場で作業し、そこで考えるというプロセスを自ら試行錯誤しながら積み上げるという経験をしたことは間違いない。

本稿では、筆者が2006年からの約4年間で行った内モンゴルでの研究を中心に、どのような現地調査を実施したのか、その手法や内容に焦点をあて、研究全体のフレームにも言及しつつ、一つの実践事例として報告する。

1. 研究・調査のフレーム

1-1. 研究の背景と目的

広大な草原に、白く丸いテントが並ぶ風景。調査を始めるまで、モンゴルに対して抱いていたイメージであるが、現在内モンゴルを訪問してこのような風景に遭遇できるのは、観光地を除くとごく限られた一部の地域のみである。

中国・内モンゴル自治区には約436万人のモンゴル族が暮らしており²⁾、これは独立国家であるモンゴル国の人口³⁾を超える人数である。それでも、自治区の総人口に占めるモンゴル族の割合は20%に満たない。古くから中国王朝の影響を強く受けてきた地域であるため、農耕化や都市化の勢いは激しく、1949年中華人民共和国成立以降は中国政府に属する一行政区としての道を歩んでいる。人民公社設立（1958～1961年）、大躍進（1958～1961年）、文化大革命（1966～1972年）等、社会主義体制に基づく近代化を経験し、その後も中国全土で進行する都市化や工業化、市場経済化等あらゆる影響を受けて、牧畜民の定着化が進行している。特に、1978年より始まった改革開放政策をきっかけとしてモンゴル族の生業は大転換を迎えた。1980年代生産請負制導入⁴⁾以降の家畜の私有化と放牧地の使用権分配により、それまでは季節移動をしながら草原や家畜を維持してきたが、土地の境界を有刺鉄線で区切るようになったのである。事実上「遊牧生活」は不可能となり、各世帯には住所（番地）が与えられた。

更に2000年代以降の生態移民政策⁵⁾は、牧畜民の定着化に拍車をかけている。このような状況に伴い、草原悪化や沙漠化といった環境問題が顕在化し、伝統的な生業や生活様態が短期間で大きな変貌を遂げている。

定着化の契機や移行期間、過程は地域によって一様ではないが、なかでも牧畜民の居住空間に着目すると、移動住居ゲルからバイシンと呼ばれる固定家屋への移行、宿営地の固定化、集落形成といった劇的な変容を僅か数10年の間に経験している地域が多い。

このような背景より、中国・内モンゴル自治区におけるモンゴル族牧畜民を対象に、定着化に伴う居住空間の変容過程とその要因を明らかにすることを目的とした。

写真1 宿営地の移動ゲル

写真2 定着拠点のゲルとバイシン

1-2. 研究の方法

現地調査を主軸とした研究を実施するなかで、具体的には以下の課題を設定し、調査計画を立てている。

- (1) 牧畜民の定着化と生活様態の変化について自治区全体的な動向を把握する。
- (2) 牧畜民の移動性が比較的高い地域及び低い地域を選定し、それぞれの移動放牧の形態、居住形態、住居や集落の空間構成について、その特徴と変容過程を分析する。

課題(1)については、大規模な研究チームとして毎年1度の全体合同調査を実施した（表1）。研究チームは、奈良女子大学を中心とする研究者及び中国・内モンゴル大学モンゴル学学院の研究者が協力して組織したものである（科学研究費補助金・基盤研究A・18200045・研究代表者：今井範子）。調査地は現地研究者と議論の上、自治区全体の中で、典型的な草原地域・沙漠地域・半農半牧地域に区分される地域を選出し、調査を実施した。筆者は、研究協力者及び事務局として、調査計画とコーディネート、調査資料の取りまとめと発表等を担当した⁶⁾。

表1 全体調査概要

調査地・調査期間・参加者数

シリングゴル盟シリンホト市

2006年9月15～19日（参加者13名）

2

アラシヤ盟アラシヤ左旗・右旗

2007年8月19～25日（参加者12名）

3

赤峰市バーリン右旗

2008年9月12～16日（参加者17名）

4

フルンボイル市新バルフ左旗・陳バルフ旗・エヴィンキ族自治旗

2009年8月5～12日（参加者16名）

課題(2)では、比較的小規模なグループ、もしくは一人での調査を行った(表2)。研究チームの一部としての調査ではあるが、研究計画や調査準備、実際の現地調査からまとめまで、すべて主体的に行った。移動性の高い地域として、シリングゴル盟北部及び東ウジュムチン旗におけるゲルの利用実態と用途変化(上記科学研究費補助金による)、バイシンの導入状況と年間を通じた両住居の使い分け(2008年度住宅総合研究財団助成金、代表：中山徹による)を中心に分析した⁷⁾。移動性の低い地域として、シリングゴル盟南部・フベートシャル旗における集落形

成の過程、牧畜業の変化、集落の空間構成、住居の平面構成を中心に分析した⁸⁾(上記科学研究費補助金による)。

上記の軸となる調査研究の他にも、共同研究者の留学生が取り組んでいた子どもの学校教育と生活環境に関する調査(婭茹他：2008)や、沙漠地域での禁牧政策に関する調査、モンゴ

ル族の民間信仰にもとづく祭り調査等にも同行し、調査補助を行った。留学中には、研究チームとは別に、個人的な知人を頼って訪問した地域もある。

表2 個別調査概要

調査概要調査地・調査時期・(参加人数)

1

ゲルの利用実態調査シリングゴル盟北部*図1参照

2006年6月・9月(5→3名)

実測・聞き取り(13世帯)

2

牧畜民の定着化と集落形成に関する調査

シリングゴル盟フベートシャル旗

実測・聞き取り・観察(7世帯) 2007年2月(1名)

3

牧畜民の定着化と集落形成に関する調査2 シリングゴル盟フベートシャル旗

実測・聞き取り・観察(4集落) 2007年7月(1→2名)

4

牧畜民の定着化と集落形成に関する調査3 シリンゴル盟フバートシャル旗

聞き取り・観察（1世帯） 2008年7月 （1名）

5

ゲルの利用実態及びバイシン導入実態調査シリンゴル盟東ウジウムチン旗

実測・聞き取り（18世帯） 2008年8月・9月 （4→3名）

6

ゲルの利用実態及びバイシン導入実態調査シリンゴル盟東ウジウムチン旗

実測・聞き取り（6世帯） 2009年2月（3名）

7

牧畜民の定着化と集落形成に関する調査4 シリンゴル盟フバートシャル旗

聞き取り・観察（2集落） 2009年5月（1名）

8

ゲルの利用実態及びバイシン導入実態調査シリンゴル盟東ウジウムチン旗

実測・聞き取り（4世帯） 2009年6月（2→4名）

9

ゲルの利用実態及びバイシン導入実態調査シリンゴル盟東ウジウムチン旗

実測・聞き取り（14世帯） 2009年9月（2→3名）

図1 調査地位置図

2. 調査内容

ここからは、具体的な事例と体験談をもとに調査の内容を紹介する。

2-1. 突撃訪問とミルクティー

調査を始めた当初、大きな関門は生活に使用しているゲルを探すことであった。背景でも述べたとおり、現在、内モンゴル自治区において観光用以外のゲルを見つけることは難しく、実際に生活をしているゲルとなるとよほど地元で詳しい人にしか分からない。運転手の方にも、あらゆるネットワークを駆使して調査地を探して頂いた。しかしその年は重度の旱魃が当該

地域を襲っており、家畜を避難させる準備に迫られている牧畜民に、調査を依頼することが困難であった。そこで、とにかくゲルの多そうな地域を車で走ってみて、見つけたところに突撃

訪問しようということになった。

意外にもゲルはたくさん発見できたのだが、どれも人のいる気配が無い。これらのゲルは、常時生活が営まれているものではなく、臨時的に建てられた「オトルゲル」と呼ばれるものであ

った。オトルとは家族全体の季節移動とは別に、「一部の者が、一部の家畜を連れて、一時的に

移動する分派的な移動」（小長谷、1996:12）を表す言葉として知られている。秋の家畜を太ら

せるシーズンや、旱魃・雪害から家畜を守るために行われることが多い。この時みられたゲル

は、早魃対策での移動や、草刈りのために雇用された牧夫が住まうもので、昼間は仕事があるため留守となり鍵がかかっているのだ。

ようやく人のいるゲルを発見し、おそるおそる声をかけてみる。運転手の方に、家の主人が出てくるまで車から降りないように指示された。牧畜民は家畜を守るために番犬を飼っていることが多く、部外者には警戒するようにつけられているのである（その後、実測の際に犬に追

いかけられ冷や汗をかいたことが何度もあった）。運転手の方と家の主人との話がまとまりゲル

の中に通される。しかし、見ず知らずの外国人が突然訪問した家で、家族のこと、仕事や家畜、住居の建築費などプライバシーに関わる質問を投げかけるのはどうしても躊躇してしまう。そこでまずは世間話で場を和ませる必要がある。ただし当時の筆者は、モンゴル語は勿論、内モンゴル自治区における共通語である中国語も全く解しておらず、運転手の方やモンゴル族の留学生の会話をBGMに、出された塩入のミルクティー（モンゴル語でソウーティチェ）をひたす

ら飲むことしかできなかつた。短くても30分、長い時には1時間以上経ってからようやく調査を開

始するため、その頃には慌ててトイレとなる隠れ場所を探す必要があるほどにたくさん飲んで

いた。ミルクティーと言えば、日本では甘いという感覚があるため、その独特の風味に最初は面食らった。しかし何度も調査を重ねるうちに、このミルクティーを飲むとその家の特徴が分かるよ

うになってきた。塩加減で主人の出身地に検討が付き、投入される牛乳やバターの有無と量でその年の家畜の状況を推測できるのである。そして何より、どんなに警戒していても、どんなに忙しくても、お茶とチーズで客人をもてなす準備ができていた牧畜民の習慣を体感した。

2-2. 家を測ること

研究のメインテーマである定着化と居住空間の変容を探るため、家屋及びその周辺を実測することは、調査の重要な目的である。しかし、いくら打ち解けたとはいえ、家をメジャーで測

り、鍋や靴まで図面に描き込む様子を見て、怪訝な顔をされたことは何度もある。それでも実測を拒まれたことは一度もなく、むしろ手伝って頂くことも多かった。もしも自分の家に誰かがや

ってきて、隅々まで実測するとなるとどういう対応をするだろうか。見せたくないものは納戸と

する部屋か押入れにしまい込み、開かずの扉をつくるであろう。そのような対応をされた家は少なく、ほとんどの場合、寝室や子ども部屋等プライベート空間にまで足を踏み入れることを許された。これはもしかすると、一つの空間で食事から就寝、団欒に客のもてなしまで、あらゆる

機能を内包していたゲルでの生活経験から生じた、公と私の境を可視化せず、部外者を空

間的に拒絶しない文化なのかもしれない。

心配していた相手の反応はクリアーできたものの、限られた時間のなかで必要な情報を収集し、図面を描くという作業は予想以上に苦勞した。図面表現の基礎は習得した上で、日本でも何度か実測演習を行い調査に臨んだのだが、固定家屋パイシンは壁厚が40cm以上あり、寸法の測り方や図面表現を変える必要があった。日本の住宅設計では、壁の芯から芯までの寸法を与えていくのだが、それでは描いているうちにズレが生じ、スケールアウトしてしまう。

ま

た、あまり調査時間が長くなると迷惑をかけるため、既に世間話で1時間もかけている場合、い

かに素早く作業を進めるかが課題となった。図面の描き込みは慣れるしかないのだが、測量の際にその家の子どもの興味を誘いメジャーの端やレーザー距離計をあてる板を持ってもらうことを試みた。また、モンゴル語と中国語の数字を覚え、運転手の方が測ってくれる寸法を描き込むことができるようになった頃、作業は一段とはかどった。

家を測ることのメリットは、言葉と心の壁を越えやすくなることである。何をしているのか図面

をみれば一目瞭然で、難しい説明は必要ない。また、実測作業を共同で行うことにより距離感が縮まる。更に、インタビューでは聞きづらい話題も図面を持って家の中のモノを説明してもら

う段階で自然に引き出すことができる。事前に用意している調査項目と流れから外れ、具体的な空間やモノと対峙したときにこそ、聞きたい答えが見つかることが多かった。

2-3. 牧畜民のスケール感

牧畜民の居住空間の構成要素として、家屋の他に畜舎、家畜囲い、井戸、燃料置場等が挙げられる。それらの配置される場所を測っていると、どうも納得のいかない疑問が湧いてくる。

畜舎や井戸、燃料等は毎日使用するものであるにも関わらず、家屋から200mほど離れており「遠い」ところに位置している気がするのだ(図2)。土地の制約がないのだから、もっと「近く」

すればいいのにと言うと、主人は十分「近い」じゃないかと答える。何故ここに畜舎を建てたの

か、何か意図があったのかという質問をしても、家屋から「近く」で便利なようにという答えが返

ってくる。通訳をしてくれた留学生も笑いながら、どんな風に訳したらいいか分からないと言う。

内モンゴル自治区の面積は日本の3倍以上あり、広い地域では1世帯に分配されている区画が約2km×3km四方以上で隣家を目視できないこともある。ここでは「近い・遠い」「狭い・

広い」「大きい・小さい」といったスケール感が、日本のそれとは大きく異なるのである。このス

ケール感を体得するまでには時間を要したが、それだけではない、牧畜民の生業の中から生まれる距離感や美意識を発見したのは、随分後のことであった。

図2 沙漠地域における牧畜民の宿营地平面図兼配置図

出典：参考文献（咏梅他、2010：52）の図3を加筆修正

2-4. 春節の牧畜集落

一連の調査の中で最も長い期間、1人で滞在型の調査を実施したのが「ホト」と呼ばれる小集落である（写真3）。モンゴル語も中国語も挨拶程度しか覚えておらず、辞書を握りしめなが

らの不安な初対面となった。救われたのは、当時3歳になったばかりの女の子が初めてみる外国人である筆者に関心を持ち、すぐになついてくれたことである。彼女の覚えたてのモンゴル語は理解しやすく、少しばかりのコミュニケーションが可能であった。彼女が嬉しそうに遊ぶの

をみて、家族の方々も心を開いてくれたように思う。

ちょうど春節の時期で、家の中も集落も祭事を迎える準備が着々と進み、日本で言う師走の空気に包まれていた。言葉ができない分、観察で何をしているのか記録した。煙突の煤を払ったり、民族衣装を日干ししたり、炉の修理をしたりといった普段みることのできない作業は後

にそれぞれ作法や意味があることを知った。また、新年の深夜には集落中の住民が挨拶まわりをする行事に参加し、別の集落との行き来もした。この時、近くにいたお姉さんに今来たのは

誰かという質問をすると、すべて「マネ・ドゥー（私たちの弟）」という返事が返ってきた。血縁の

有無は関係なく兄弟姉妹の呼称を用いるので実際の関係が良く分からない。そこで、家族関係図を描きながら、その日集まった人がどこの誰なのかということを調査していった。するとそ

の集落の全容が少しずつ明らかになってきて、どうやら元々1つだったものが人口増加や政策等の影響によって4つに分離しており（図3）、現存する集落の配置は、かつての遊牧時代における宿营地の場所と深く関わりのあることが分かった。

調査を始めた頃はモンゴル族の居住空間として、ゲルのことしか予備知識がなかったのだが、このような機会を通じて牧畜集落の存在を知り、その成り立ちと空間構成にモンゴル族の居住空間変容を知る上での大きなヒントを得ることとなった。

図3 ホトの社会変容と牧畜業・居住形態変遷の関係年表

出典：参考文献（野村理恵他、2010c：1148）の図11より

2-5. フンとアルガル

木材が入手し難い草原では、家畜のフンが燃料となる。主に牛のフンを用いる。このフンは拾い集めてきれいに成形し、積み重ねて乾燥させる（写真4）。これはアルガルと呼び、排泄物

を示す言葉と異なる。このアルガルがいかに豊富に、いかに美しく積まれているかが、その家

の妻の評価に繋がるのである。人が暮らす家屋よりも、アルガルや畜舎、家畜囲いとその手入れ状況が、その家の豊かさを表象する。

何度目かの調査時、集落の実測を通して土地の所有関係が気になり始めた。当該地域では、1982年以降、土地の所有権が国からホトに移行し、その中で各世帯の人数に合わせて使用権が分配されている。しかし家屋と畜舎が集まっている居住部分約3haについては、ホトの共有地となっており、本来は各世帯の使用権が定められていないはずである。ところが、家屋の前や畜舎の周りには日干しレンガの塀やフェンスが張り巡らされている（図4）。共有地の占有

はどのように起こったのだろうかという疑問を投げかけてみるのだが、なかなか話がかみ合わない。どうやら土地所有の観念が政策的な土地割とは異なるところにあるらしい。

その答えは、フンとアルガルの関係に隠されていた。普通、自らの家畜のフンを拾いアルガルを蓄えるのだが、年代を追うごとに密集してきたホト内では、家畜の動線の混乱が起こり、それに伴ってフンを拾う範囲に暗黙のルールが必要となった。また、せっかく綺麗に積んだアルガルを家畜が倒してしまうという問題も起こった。塀やフェンスは土地の私有化というよりも、

アルガルという財産の所有権を主張するための可視的な境界となっている。また、家畜の動線に関しては、ホト内を大きく2つに分ける壁面が連なっており、そこで家畜の行き来が遮られて

いることも分かった。これは、ホトに居住する2つの家系（図5）の境に存在し、両家系で財産の

混乱が起こらないように設置されたと考えられる。一方、家畜のフンはアルガルにもなる貴重な財産であると同時に、それで家屋が汚れることも嫌うため、産まれたてで特別に世話が必要な子どもの家畜以外、部屋の中に入れることはない。遊牧時代には畜舎や家畜囲い、アルガル置場に十分な距離をとることができるため、特に問題にならなかった牧畜民の必要とする距離感や美意識が、集落形成によって変化した居住空間の中で顕在化したと言える。この集落での発見より、牧畜民がもつ「近さ」と「遠さ」の基準の一端をうかがい知ることができた。

図4 ホト配置図（2009年時点）

出典：参考文献（野村理恵他、2010c：1144）の図6より一部抜粋

図5 ホト家族関係図

出典：参考文献（野村理恵他、2010c：1144）の図5より

2-6. 調査団からみえるもの

毎年一度の全体調査は、10～20名近い大規模な調査団での実施となった。奈良女子大学内でも学部や学科の垣根を越え、また学外の研究者も参加する。少人数の調査と決定的に異なるのは、準備にかける期間と、不確定要素を確定に変えるための手配を要する点である。これまで述べてきた少人数の調査では、現地に行くまでいつ、どこに訪問できるのか分からないということがほとんどで、様子をみながら次の行動を決めていくというスタイルであった。しか

し、これだけ大人数となるとあらゆることを事前に決めておかなければならない。旅行社を通

したツアーではないため、現地の知人と直接打合せをするのだが、日本のビジネス感覚では話がまとまらない。ホテル、移動手段、連絡先、訪問先の条件、安全対策等思いつく限りの手を尽くしたつもりでも、実際現地へ行くと思ってもよらないハプニングに見舞われることがあった。

また、こちらが大人数である分、当然調査される側も身構える。明らかに一般家庭ではないと分かるほど規模の大きな敷地と家屋で、政府からの視察団もやってくるというようなモデル戸を紹介されたこともある。当初はできる限り普通の家庭を紹介して欲しいと無理難題を要求したが、そのためには、こちらの調査スタイルを変える必要があることが分かった。一方で、中国国政府がモデルとしているのはどのような生活なのか、あるいは地元住民が外国人に紹介したい家庭はどのような生活をしているのかという角度からみると、大人数での調査だからこそ知り得る、貴重な経験であるという考えに至った。

更に、各分野の研究者が集う全体調査では、学生にとって学びの機会が無数にある。聞き取りの仕方、1人では到底不可能な広範囲に渡る実測、図面の描き方から宴会の盛り上げ方まで多種多様な方法や振る舞いを身近にみて、教わることができる。調査だけでなく、草原で星

写真3 ホト全景 写真4 アルガル
を見上げながら将来のことを相談したり、他愛もない会話から多くの助言や励ましを頂いた。

こ
れは、普段の学校生活では絶対に得ることのできない贅沢な経験で、大きな財産になったと確信している。

2-7. 調査をこえて

特に海外でのツアーや調査研究を支える要素として、信頼関係の構築が不可欠であることを述べておきたい。これは、現地の受入機関やコーディネーター、調査対象の個人に加えて、調査チームを組む場合にはその中での人間関係も含む。

筆者の場合、特に現地調査で多くの時間を共にした留学生との意思疎通に苦労した。お互いに気遣いながらうまくやっていたのだが、自分では全く意識していない一言が、相手を傷つけてしまい悩んだり、考え方や感覚の相違を強く感じたこともあった。しかしこれは、言葉や文

化の問題ではなく、相手への期待や信頼が大きくなる段階で自然に起こった出来事であったと捉えている。その後あらゆる場面において、なくてはならない存在として協力関係を築くことが

できた。今では各々が別の環境で研究や調査に取り組んでいるが、特別な時間と経験を共有した仲間として、その信頼関係が今後も続くことを願っている。

また、調査対象であった家族とも親戚付き合いにまで発展した例がある。全く会話が成立しなかった4年前から何度も訪問を繰り返すうち、結婚式や親戚の行事に参加させて頂き、ついには「わたしたちの娘」と呼んでもらうようになった。羊の世話が一番得意だった末っ子の妹が

結婚、出産を経て町のマンションで暮らすようになった。当時3歳だった女の子も学校に通い始

め、それに伴い女の子の父親で集落のまとめ役だったお兄さんは、町でモンゴル薬を扱う開業医を始めた。帰国後届いた家族からの便りによって、論文を書いたからといって時間が止まる訳ではないという当たり前のことに気付かされた。今後も変化を続ける家族と集落に関わり、生業や生活を維持できる方策について共に考える機会をつくりたい。

3. 教員としての一步

2010年12月の東海大学への訪問は、筆者が初めて教員という立場で参加したスタディツアーである。これまで自分の研究のために実施してきた調査と異なり、博士後期課程修了後、奈良女子大学の大学院教育改革支援プログラムによって開講されている授業「フィールドサーベイ」の特任助教として同行する機会を得た。その前にも同授業においてティーチングアシスタントの立場で内モンゴルへのツアーに同行している。内モンゴルでは、引率というより後輩を

迎え入れるという心境でコーディネートと案内をした。一方、台中は初めて訪れることもあり、ほ

ぼ全てを学生に任せ、連れて行ってもらうという感覚であった。東海大学でのスタディに参加したのは日本人学生2名と中国からの留学生4名。全員が現地を訪れるのは初めてで、台中の市街地見学をもとに、まちづくりの提案をするという多少ハードなプログラムであった。何がで

きるかイメージが曖昧なまま現地へ向かい、地図を片手にまち歩きをした。学生は、そこで集めてきた素材をまとめ、学術検討会で発表する資料を作成するプロセスにおいて随分苦戦していた。

教員も参加してミーティングをした後、学生はパワーポイントの作成、翻訳、その他日本で準備してきた資料の補強等、夜を徹して作業していた。当日、短期間の滞在で分かることは僅かで、内容が十分であったとは言えないが、想像以上によくまとまった発表を堂々としているよう

にみえた。また、普段は大人しい留学生が自ら手を挙げて議論に参加している様子に驚いた。その後の懇親会では東海大学の学生とも交流し、晴れ晴れとした笑顔が彼女たちの充実感を物語っていた。

何故、彼女たちは充実感を得ることができたのかと考えてみると、それぞれの立場で不可欠な役割を担っていたことが挙げられる。日本人学生には、妥協をせずに一定レベルのプレゼンテーションをしたいというこだわりがあった。また技術的な面でもその作業を引き受け、納

得のいくまで取り組んでいた。一方留学生には、言葉という強みがあった。検討会参加者の大半が中国語での議論を要しているなかで、自分たちのプレゼンテーションを自分たちで翻訳することができるのは、大きな自信となった。また、ツアー期間中、食事や移動等様々な場面で

「頼られる」という経験をすることで、日本にいる時とは異なるバランス関係ができたのだと

推

察する。

教員としての役割を振り返ってみると、なるべく学生の自発的な議論を大切にしようと思いがけたつもりであるが、調査の準備段階からもう少し適切な助言をしていれば、より深く考察でき

たかもしれないという反省がある。他方では、いかに学生を信頼し、任せることができるのかと

いう点で、教員としての覚悟と力を試されている気がする。その意味を考えると、筆者は内モンゴルでの研究において、学生として最大の機会を与えられ、複数回に及ぶ海外調査に送り出して頂いていたのだということを改めて実感した。

おわりに

東海大学訪問後、2011年1月に北海道大学へ転任した。既に新たなツアーが始まっている。その規模や内容は様々で、大学近くに位置する居酒屋の畳一帖分のスペースを心地よい空間にするという現場から、駅移転計画の現場、札幌から数100km離れた高齢化の進む村までをフィールドにする。これらはすべて研究室の学生が主体的に関わり、調査・提案をするもので、主に北海道内のまちや農村における持続可能な生活基盤としての建築や都市・農村空間について検討する。

奈良、内モンゴル、台中、北海道、その他の場所にも共通の問題があり、それぞれに最適な個別の方策があるはずである。それを探するためにツアーをする。場所も、人も、時間も、分野も、あらゆる境界をこえていけるのがツアーの醍醐味で、そこに大切なヒントがあると信じている。

謝辞

非常に個人的な体験談を綴ってきたが、これが少しでも特集のテーマに沿っていれば幸いである。また、冒頭の言葉で内モンゴルへの扉を開き、幾度にも渡る貴重なツアーを経験させて頂いた奈良女子大学中山徹教授をはじめ、内モンゴルを通じて関わったすべての方々と、今回の機会を頂いた東海大学の関係者、編集委員の皆様へ感謝の意を表したい。

(のむら りえ 北海道大学)

注

1) フィールドワークは現場（フィールド）での作業（ワーク）という意味で野外調査一般を表す広義での用法

と、質問紙や調査票を使って比較的短期間に資料を収集する「サーベイ」との対比で、比較的長年に渡り継続的に対象となる社会に「参与」し「観察」する中で現地での経験に基づくデータを集積し、数量的分析では表れない事実を発見していく作業という狭義の意味での用法がある。筆者はなるべく狭義の意味での調査を心がけたが、必要に応じてサーベイの手法も取り入れ、結果的には双方の中間的な調査を実施した。

2) 内蒙古自治区人民政府主办 走进内蒙古（2011年1月25日参照）：

(<http://intonmg.nmg.gov.cn/channel/zjnmng/col6698f.html>)によると、2008年の全自治区年末人口は2413.73万人、そのうちモンゴル族は436.47万人である。

3) モンゴル国家統計局National Statistical Office of Mongolia (2011年1月25日参照) :

(<http://www.nso.mn/>)によるとモンゴル国の2007年末総人口は236.52万人、2011年1月現在で約279万人である。

4) 1978年の中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議によって打ち出された改革開放路線に基づき、全国の農村で「家庭聯産承包責任制」(以後、生産責任制と表記する)が導入された。内容としては、「包産到戸」(集団の農地を人口や労働比率によって個人へ配分し、生産経営を各世帯が実施すること)が実施され、次いで「大包干」(共同経済組織が、土地以外の資産の価値を規定し、世帯へ配分すること)によって、人民公社による生産の統一管理が終止した(内蒙古大辞典編委員、1991:279)。1982年には、内モンゴル自治区でも人民公社が解体され、牧畜地域に生産責任制が導入された。

5) 牧草の状態が悪化した地域の牧畜民と貧困牧畜民を鎮やソム(内モンゴル自治区の行政単位で鎮に相当)の所在地に移住させ、乳牛飼育や第二次、第三次産業に従事させる政策(内蒙古年鉴編委会 内蒙古自治区地方志办公室年鉴编辑部編、2006)。内モンゴル自治区では、2001年に発表された「実施生態移民和异地扶貧移民试点工程的意見(生態移民と貧困扶助移民試験プロジェクト実施の意見)」に基づき、2002年より6年間で計65万人の生態移民を実施することが計画されている(初春霞・孟慧君、2005:57)。

6) 2006年度の調査結果は以下の3報参照(野村理恵他:2007)、(黒崎末侑他:2007)、(姫茹他:2007)。2007年度の調査結果は以下の3報参照(野村理恵他:2010a、2010b)、(咏梅他:2010)。2008年度以降は調査報告書(2011年2月発行予定)にまとめている。

7) 調査結果は主に2報(野村理恵他:2008、2010d)にまとめ、各学術会議で発表している。

8) 調査結果は主に(野村理恵他:2010c)にまとめ、各学術会議で発表している。

参考文献

(日本語文献)

黒崎未侑、今井範子、高村仁知、中山徹、長坂大、野村理恵、増井正哉、宮坂靖子、武藤康弘、室崎生子、姫茹、咏梅、敖敦格日勒、上野勝代、瀬渡章子、田中麻里 (2007) : シリングル盟における固定家屋に住む牧畜民の生活様態—中国・内モンゴル自治区草原地域におけるモンゴル民族の生活様態とその変化 (第2報)、奈良女子大学家政学会・家政学研究Vol. 54、No. 1、pp. 46-53

小長谷有紀 (1996) : モンゴル草原の生活世界、朝日新聞社

野村理恵、今井範子、黒崎未侑、高村仁知、中山徹、長坂大、増井正哉、宮坂靖子、武藤康弘、室崎生子、姫茹、咏梅、敖敦格日勒、上野勝代、瀬渡章子、田中麻里 (2007) : シリングル盟の移民村における牧畜民の生活様態—中国・内モンゴル自治区草原地域におけるモンゴル民族の生活様態とその

変化 (第1報)、奈良女子大学家政学会・家政学研究、Vol. 54、No. 1、pp. 35-45

野村理恵、中山徹、今井範子、室崎生子、姫茹、咏梅 (2008) : 定住生活における移動住居ゲルの利用実

態と用途変化—中国・内モンゴル自治区シリングル盟の牧畜民を事例として、日本建築学会計画系論文集、第73巻、第630号、pp. 1735-1742

野村理恵、今井範子、中山徹、上野勝代、長坂大、武藤康弘、室崎生子、姫茹、咏梅、敖敦格日勒、芦田奈緒 (2010a) : アラシャン盟アラシャン左旗における牧畜民の生活様態及び農業転換による生活変化—中国内モンゴル自治区沙漠地域におけるモンゴル族の生活様態とその変化 (第1報)、奈良女子大学家政学会・家政学研究、Vol. 56、No. 2、pp. 39-48

野村理恵、今井範子、中山徹、上野勝代、長坂大、武藤康弘、室崎生子、姫茹、咏梅、敖敦格日勒、芦田奈緒 (2010b) : アラシャン盟における環境政策による居住地移動と生活様態の変化—中国内モンゴル自治区沙漠地域におけるモンゴル族の生活様態とその変化 (第3報)、奈良女子大学家政学会・家政学研究、Vol. 56、No. 2、pp. 58-64

野村理恵、中山徹、今井範子、姫茹、咏梅 (2010c) : 牧畜民の定着化過程における「ホト」の形成と居住

形態の変化—中国内モンゴル自治区シリングル盟镶黄旗の「ホト」を事例として、日本建築学会計画系論文集、第75巻、第651号、pp. 1141-1149

野村理恵、中山徹 (2010d) : 年間を通じたゲルと固定家屋の利用実態—中国・内モンゴル自治区東ウジュムチン旗における牧畜民の定着化と居住環境変化、日本建築学会計画系論文集、第75巻、第654号、pp. 1917-1923

姫茹、今井範子、黒崎未侑、高村仁知、中山徹、長坂大、野村理恵、増井正哉、宮坂靖子、武藤康弘、室崎生子、咏梅、敖敦格日勒、上野勝代、瀬渡章子、田中麻里 (2007) : シリングル盟の都市部と都市近郊におけるモンゴル民族の生活様態—中国・内モンゴル自治区草原地域におけるモンゴル民族の生活様態とその変化 (第3報)、奈良女子大学家政学会・家政学研究、Vol. 54、No. 1、pp. 54-61

姫茹、中山徹、室崎生子、敖敦格日勒、今井範子、野村理恵、咏梅 (2008) : 中国・内モンゴル自治区における「逆留守子ども」の生活実態に関する研究—シリングル盟の東ウジュムチン旗を事例として、社団法人子ども環境学会・子ども環境学研究、Vol. 4、No. 3、pp. 48-55

咏梅、今井範子、中山徹、上野勝代、長坂大、野村理恵、武藤康弘、室崎生子、姫茹、敖敦格日勒、芦

田奈緒（2010）：アラシャン盟アラシャン右旗における環境政策と生活様態の変化—中国内モンゴル自治区沙漠地域におけるモンゴル族の生活様態とその変化（第2報）、奈良女子大学家政学会・家政学研究、Vol. 56、No. 2、pp. 49-57

（中国語文献）

初春霞・孟慧君（2005）：内蒙古生态移民面临问题及其对策思考、北方经济、第6期

内蒙古大辞典编委员（1991）：内蒙古大辞典、内蒙古人民出版社

内蒙古年鉴编委会内蒙古自治区地方志办公室年鉴编辑部编2006）：内蒙古年鉴、方志出版社